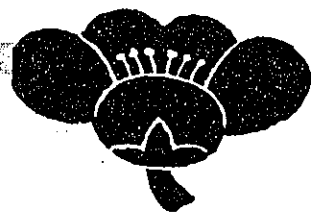


日本農民 建築

国立保健医療科学院蔵書



10012214



QLD
9
4

石原憲治

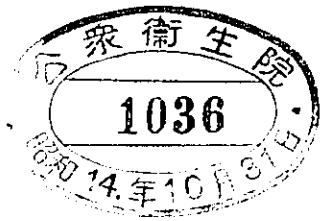
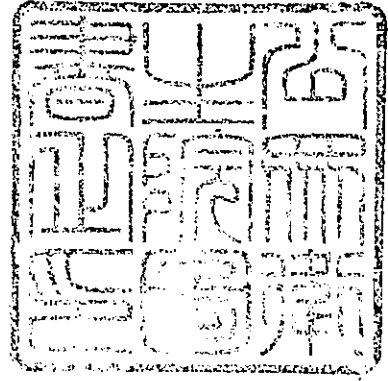
日本農民建設

第九輯



聚樂社刊

@LD
9
4



內容目次

圖版目次

- 1 本屋全景 (石川縣能美郡白峯村織田治兵衛氏)
- 2 二階内部 (同 上)
- 3 三階屋根内部 (同 上)
- 4 オミヤ内部 (同 上)
- 5 本屋全景 (石川縣能美郡白峯村山下小三郎氏)
- 6 オミヤ内部 (同 上)
- 7 本屋全景 (石川縣能美郡白峯村山下小三郎氏)
- 8 本屋全景 (石川縣能美郡水町室谷豐太郎氏)
- 9 オイエ内部 (石川縣能美郡水町室谷豐太郎氏)
- 10 部 落 全 景 (同 上)
- 11 フリヤ、オイエ内部 (富山縣下新川郡浦山村)
- 12 本屋全景 (富山縣下新川郡浦山村中村嘉太郎氏)
- 13 本屋外観 (同縣下新川郡浦山村佐々木守之助氏)
- 14 本屋前門 (富山縣東礪波郡北野村勇崎文平氏)
- 15 本屋前門 (同 上)
- 16 宅地全景 (富山縣東礪波郡大鏡屋村橋場榮吉氏)
- 17 本屋側面 (同 上)

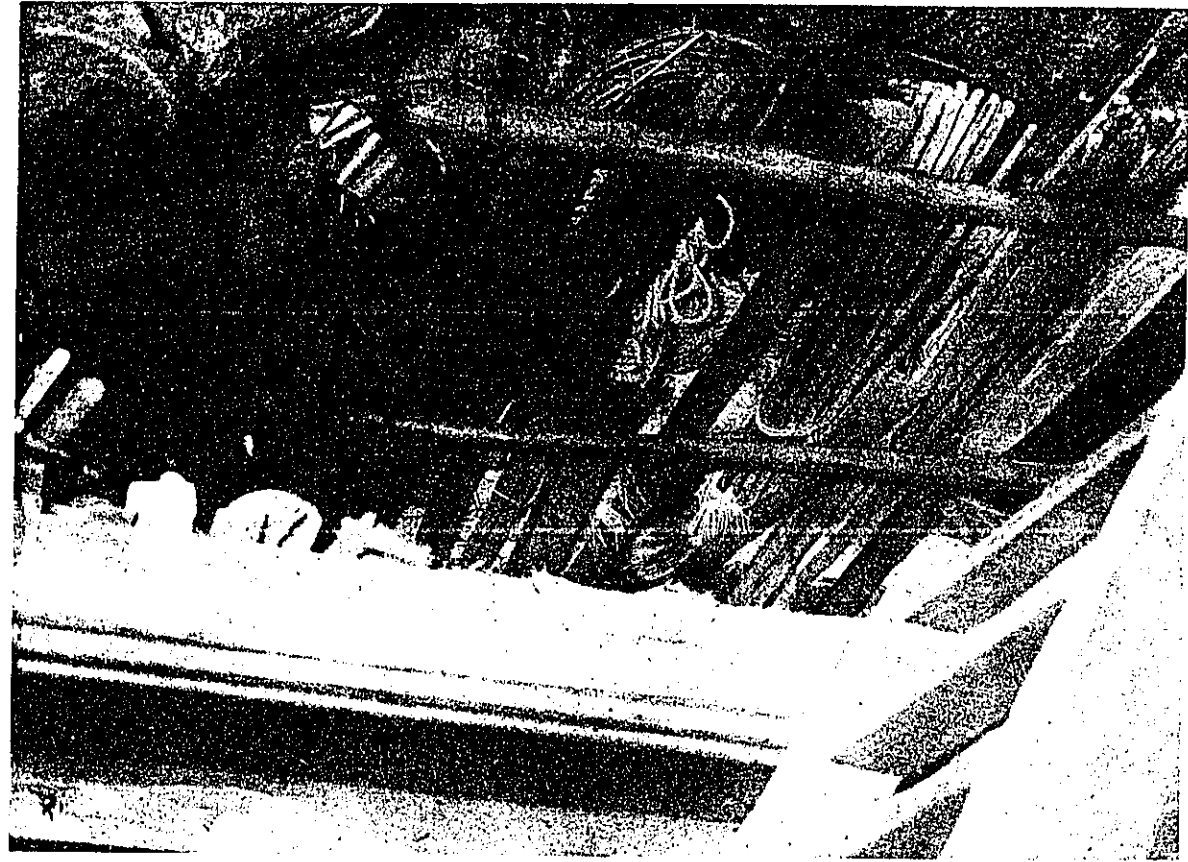
- 1 本屋側面 (富山縣東礪波郡大鏡屋村市川與吉郎氏)
- 2 宅地全景 (同縣東礪波郡上平村宇西赤尾岩瀨十次郎氏)
- 3 二階内部 (同 上)
- 4 オイエ内部 (同 上)
- 5 宅地全景 (岐阜縣大野郡白川村遠山靖輔氏)
- 6 宅地側面 (同 上)
- 7 水屋内部 (同 上)
- 8 本屋全景 (岐阜縣大野郡白川村岩下丈次氏)
- 9 本屋全景 (岐阜縣大野郡白川村和田澤之助氏)
- 10 本屋外観 (岐阜縣大野郡白川村高橋榮治郎氏)
- 11 ダイトコ内部 (同 上)
- 12 本屋外観 (岐阜縣高山町大名田武田榮吉氏)
- 13 オイエ内部 (同 上)
- 14 本屋前面 (岐阜縣山縣郡春近村大野傳右衛門氏)
- 15 座敷内部 (同 上)
- 16 長屋門 (同 上)
- 17 本屋前面 (岐阜縣山縣郡春近村野川泰市氏)
- 18 ニワ内部 (岐阜縣山縣郡春近村藤川徳市氏)

解説目次

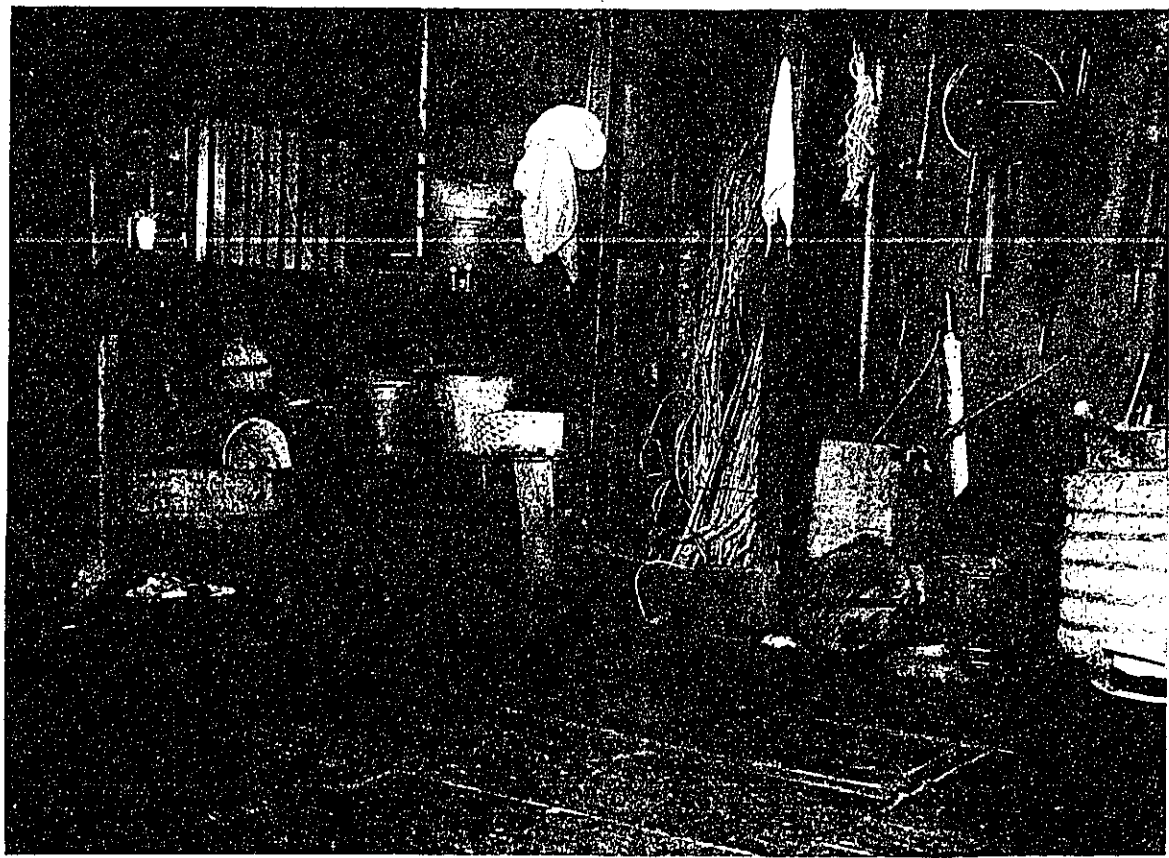
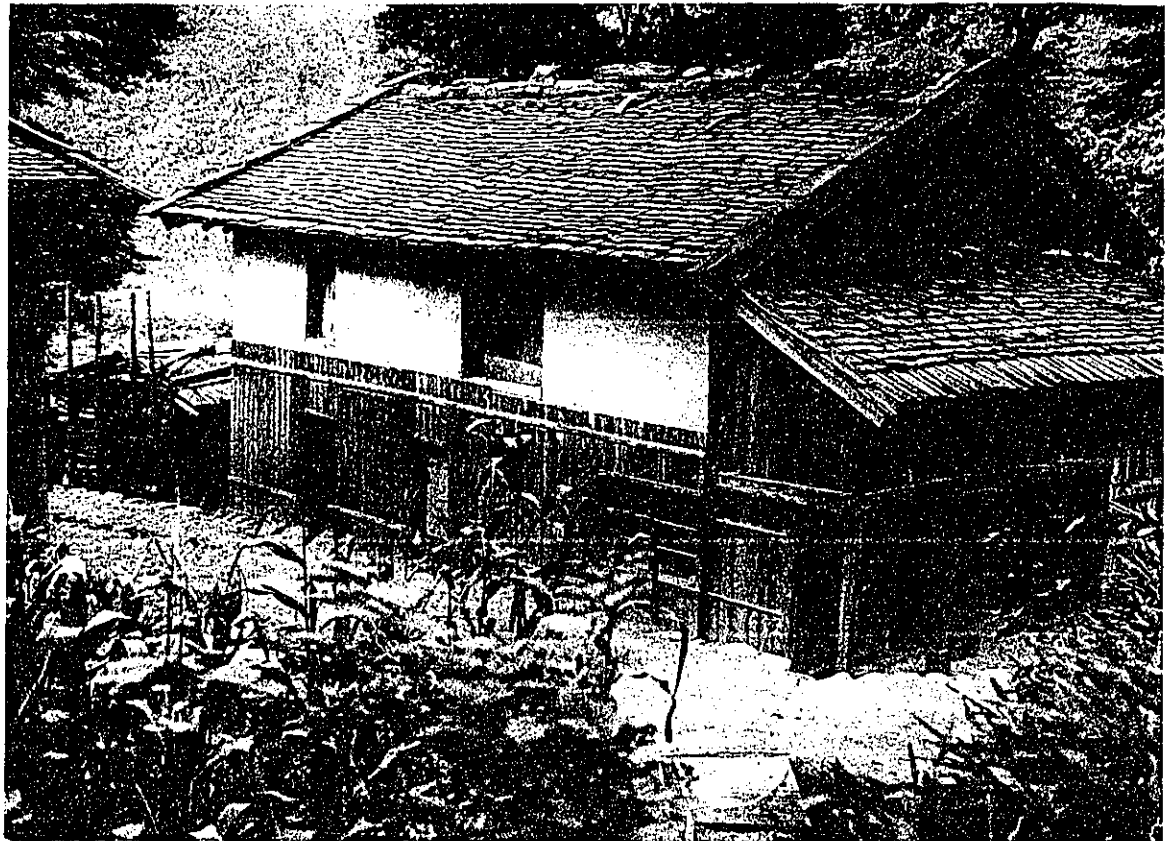
石川縣下の概観	一
圖版説明	四
富山縣下の概観	一一
圖版説明	一七
岐阜縣下の概観	二五
圖版説明	三〇

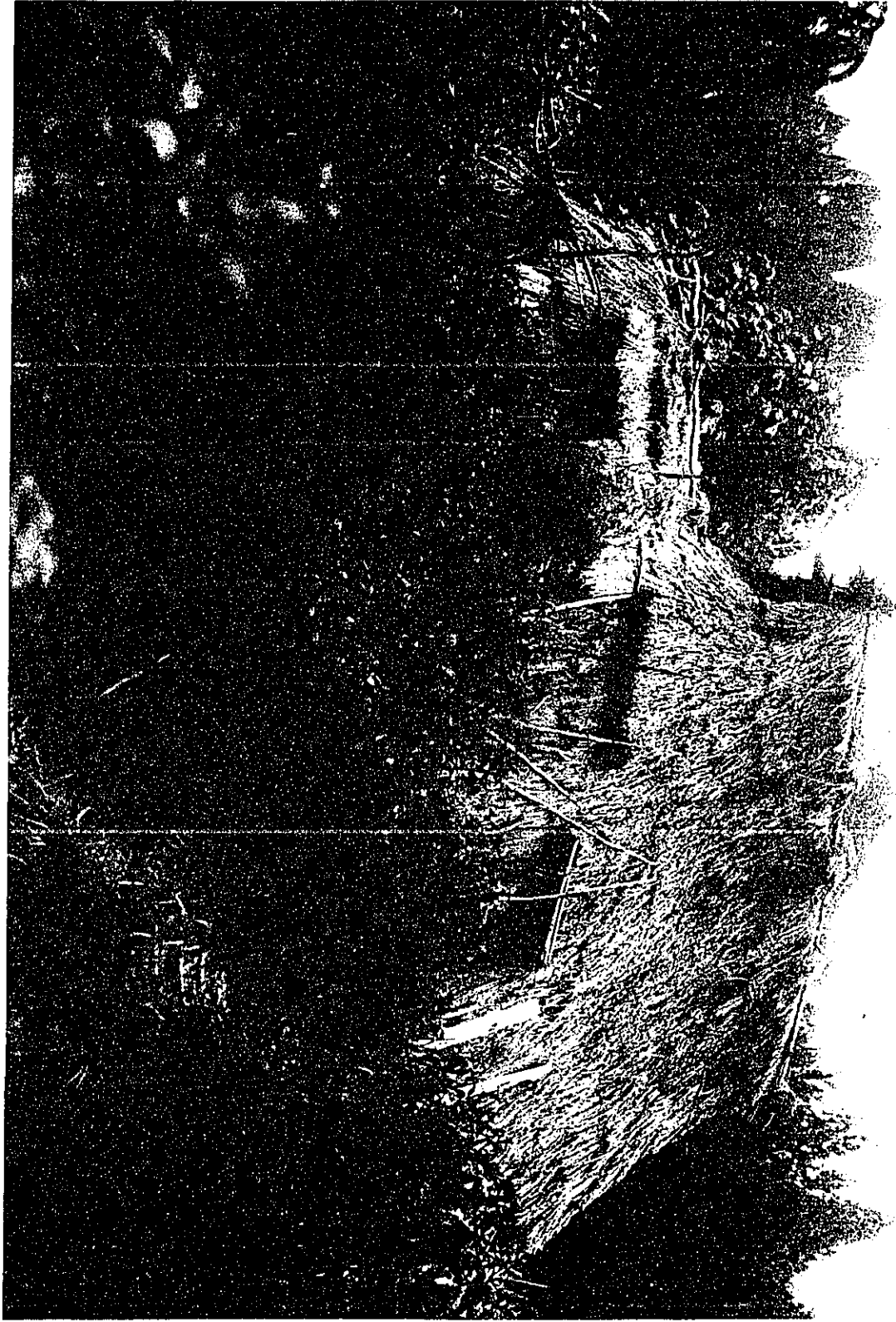
石川縣

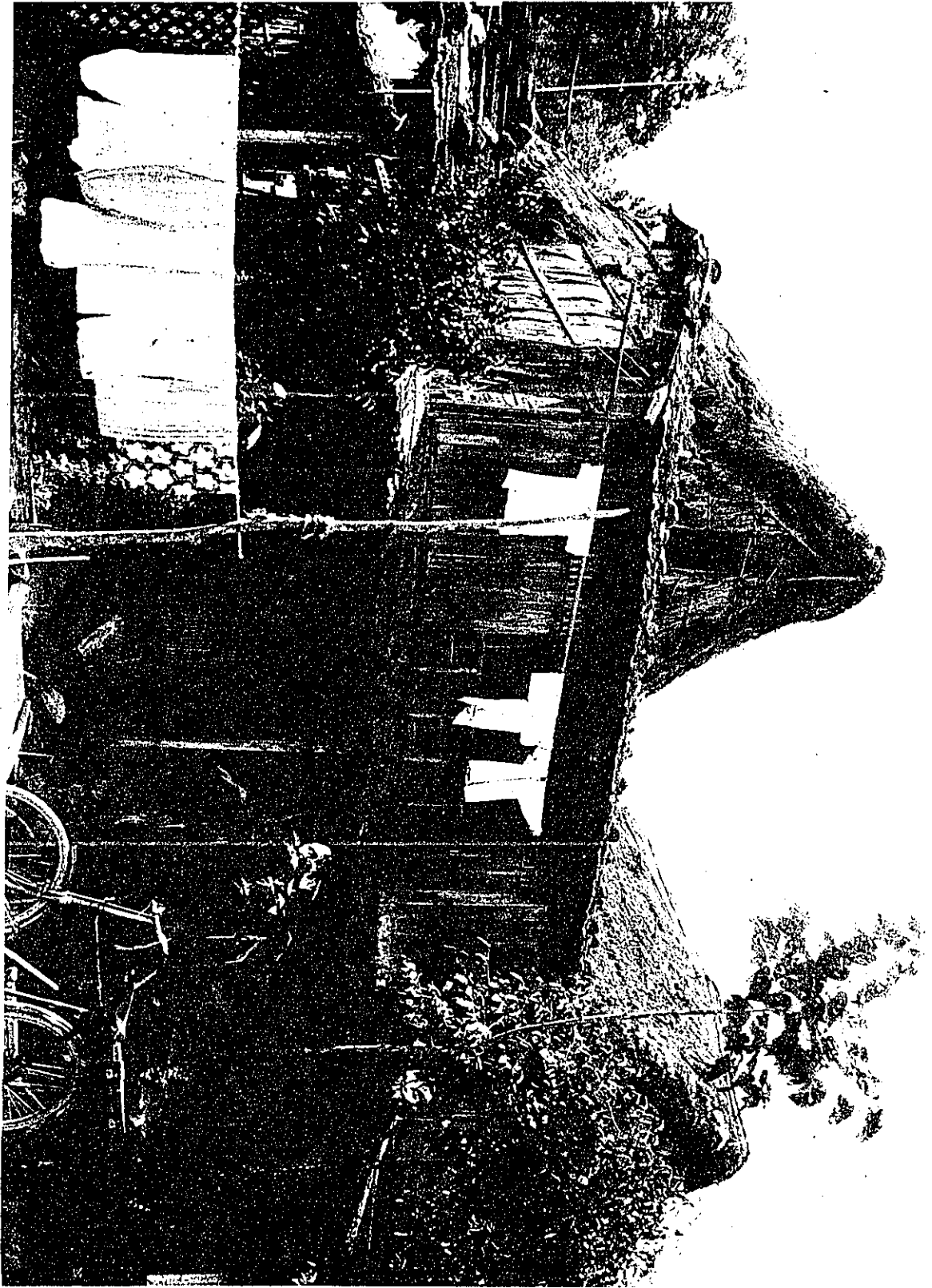




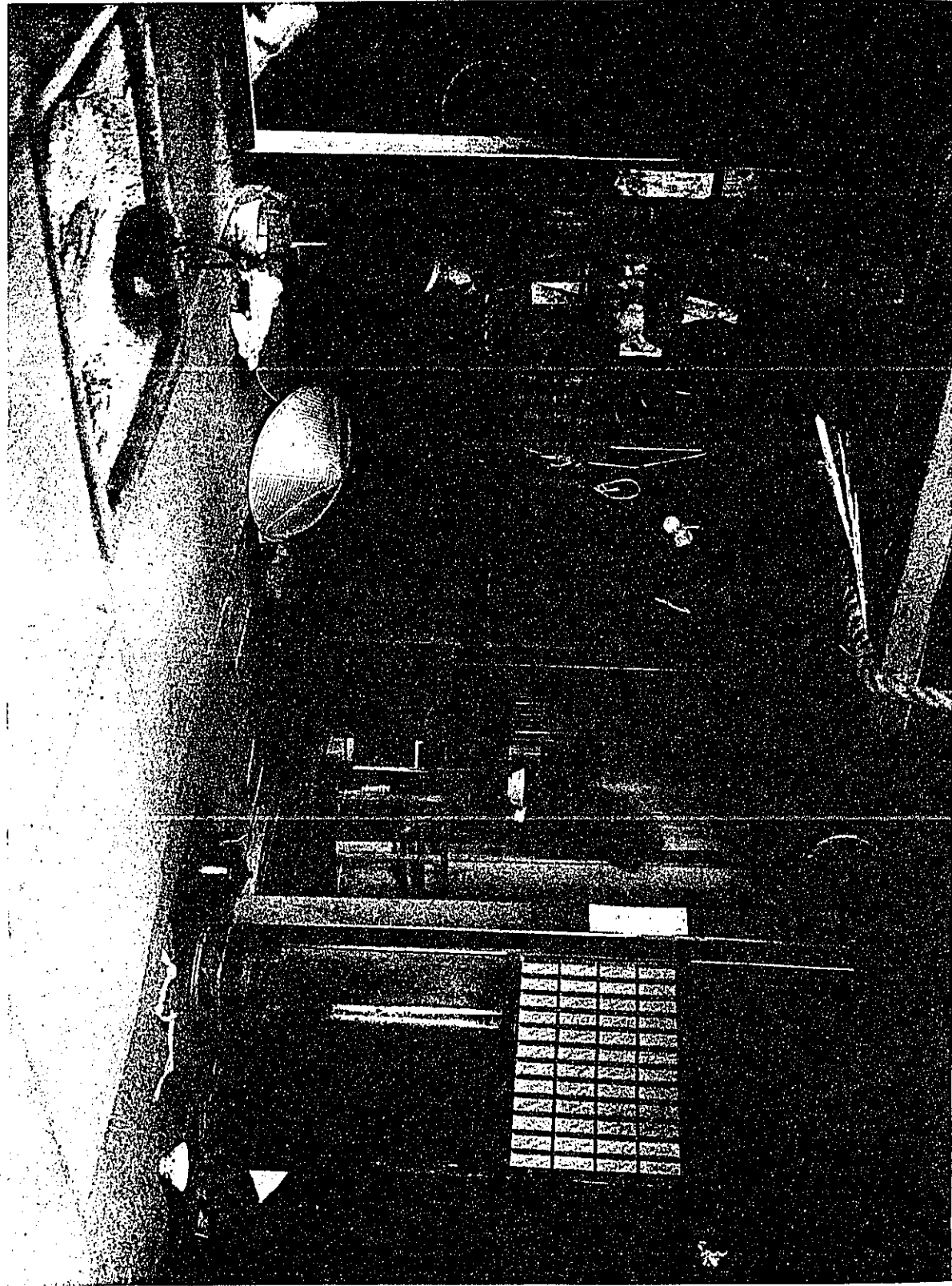












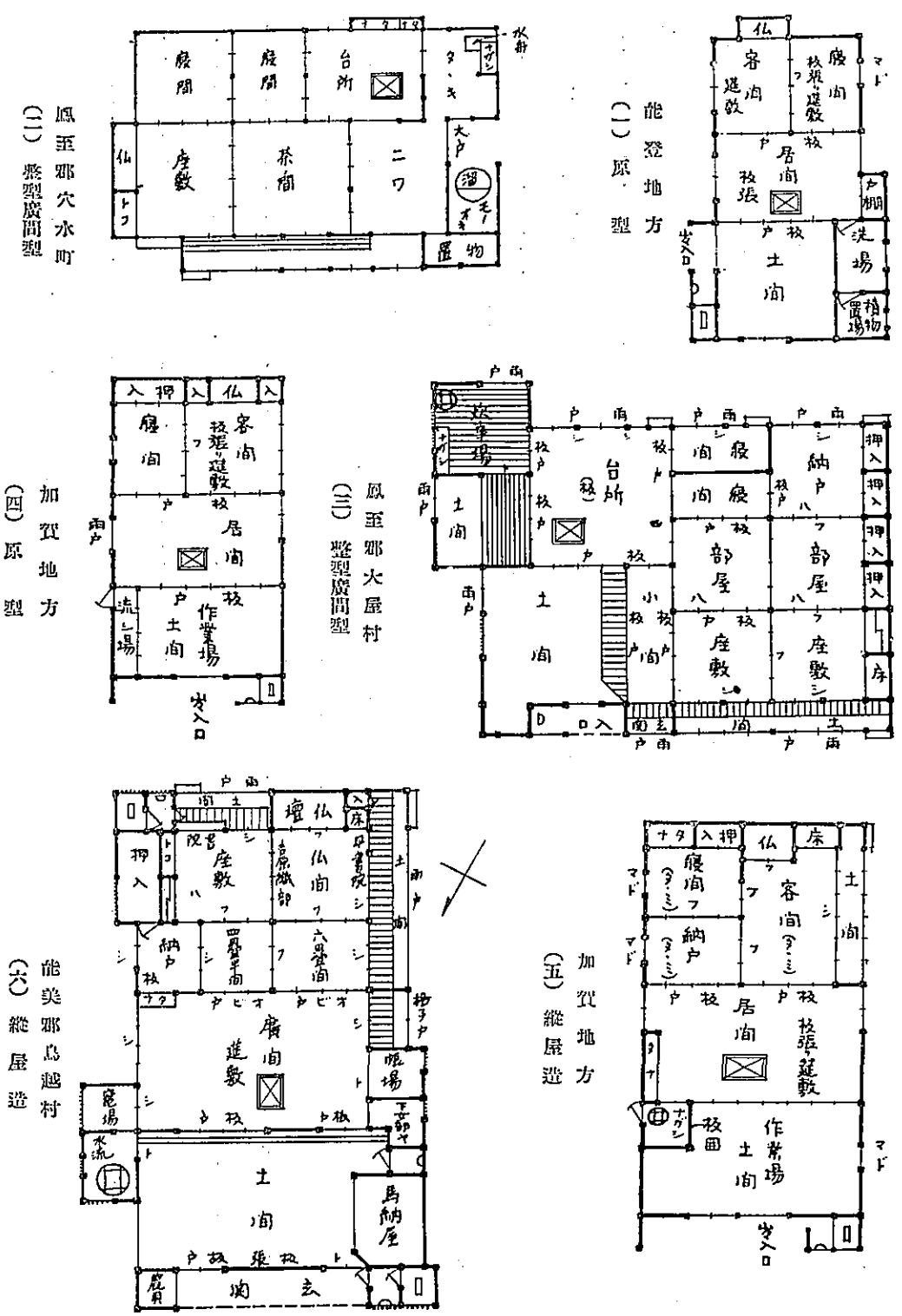
縣下の概観

本縣は富山縣の西に位した南北に細長い縣で、北の能登の方と、南の加賀の方とで稍やその趣を異にしておるが、北の方は大體隣接した富山縣の氷見郡及西礪波郡地方の廣間型の間取と似ておる。第二圖は此の附近の最も普通の間取で、廣い居間が中央にあつて、その上手に客間があり、その後には寢間と臺所が取つてある。このやうに廣間型の配列をおつて、間仕切の通つた間取を整理廣間型と稱しておるが、是は富山縣の西方に分布してある整理廣間型と同じ形式の間取である。然し此の地方には富山縣の西方に見られる様な、模範的な廣間型の形式が少なく、何れも間取の型が可なり整理に近くなつておる。この家は穴水町地方の例で、東は道路に面してゐるので、入口の大戸が妻の方に附いておるが、一般には南の方の方に附いておるものが多い。茶の間の後に寢室を取ることが、新潟縣の形式に稍似ておるけれども、座敷の床の間の位置などは異つておる。新潟縣では鍵座敷の正面に床の間があつて、その後は部屋がないのが普通である。第一圖は小農の間取を示すもので、廣い居間の上手に座敷と寢間が取つてある。土間の奥には洗場などがあり、入口は南と東の方とに開いておる。此の様な原型の間取になると石川縣の南方も同じ形式になつており、同じ系統である事を示しておる。大農の家は第三圖の如く上手に、二室の前座敷をとり、その後には部屋、納戸等が整理の形に配置してある。この地方の宅地は、母屋の下手に厩及收農小舎の棟を建て、後の方に味噌倉、西北の方に土藏を設け、是等を廊下で繼いだものがある。

南方の能美郡地方の家は妻入りの間取が多く、入口の土間から座敷の方に縦に深く配列されるやうになつておる。第四圖は、この地方の小農の間取であるが、これを第一圖に比較すると、間取の形は全く同じ原型である。能登の方では庭は、向つて右の方にあるものが多いが、この地方では左の方に付き且つ、入口が圖の如く妻の方に附いておるので、この入口から奥を望むと、庭の後に廣い居間があり、其の居間の後は中央から二室に分れて、右の方に客間、

又は佛間、左の方に寢間が取つてある。第五圖は中農の間取で、前圖の寢間の部分が二室に仕切つてあり、客間の前には椽土間がとつてあつて、その前に兩戸を閉めるやうになつてゐる。第六圖は大農の間取りで、佛間の奥が四室に田の字型に仕切つてあり、佛間、座敷などには、椽と土間とを取り、その外に兩戸が建つてゐる。このやうな妻の方から縦に配列した間取りの形式を、縦屋造りと名づけてゐるが、此の形式の間取は、南方福井縣一體並びに滋賀縣の北部伊香郡地方に亘つて分布してゐる形式である。圖版第一圖は能美郡白峰村の家屋の例であるが、その間取を第四圖の間取と比較すると、入口の玄關及大戸の附近が稍や異つてゐるが、其の形式が全く同じものであることがわかる。この部落では、居間のことをオミヤと云つてゐるが、オミヤと云ふ名稱は神社のお宮と、その發音が一致してゐても語源の關係は不明である。富山縣の原始の間取もこれによく似てゐる、が後にも説明するやうに、富山縣では廣間のことを一般にオイエとも云ひ、又オエとも云つてゐる。同縣ではオイエの間に後にも示す様に、左右に六本の柱が建つて居て是が構造の基本になつて居るが、此の地方では構造が左程明瞭に現はれて居らぬ。然しオイエと云ふ名稱は富山縣、石川縣、福井縣地方一般に分布して居て、新潟縣、長野縣及飛騨地方にもオエと云ふ方言が使はれてゐる。是等は何れも富山縣のオイエの造りと關係を持つて居るものである。尤も新潟縣の廣間型の間取は、獨特の地方的特色を構造と間取の上に持つて居るが、オイエを中心として形造つた間取の方針は一致して居る。石川縣の加賀國及福井縣一體にかけて分布して居る間取は、妻の方から入る形になつて居るので、前述の如く是を縦家造りと名付けて居るが、富山縣地方の間取に於ける平入の入口と比較して、如何なる發生的關係が存在して居るものであるかを明らかにしなければならぬ。然し是は可なり困難な問題で、或人はこの妻入の縦家造りを出雲の神社造と比較して説明をして居るが、その結論を引出す爲には、尙多くの附隨する問題を實證しなくてはならないと思ふ。それ故余は是等の事實を説明する事に止めて置き度いと思ふ。そして滋賀縣北部より福井縣及石川縣に亘つて分布して居る縦家造りと、石川縣北部より富山縣、新潟縣にかけて分布して居るオイエを中心として廣間型に發展する一聯の北陸系とを合せて

假に「オイエ造り」と稱して置く事が、より事實を明らかにする事と思ふ。



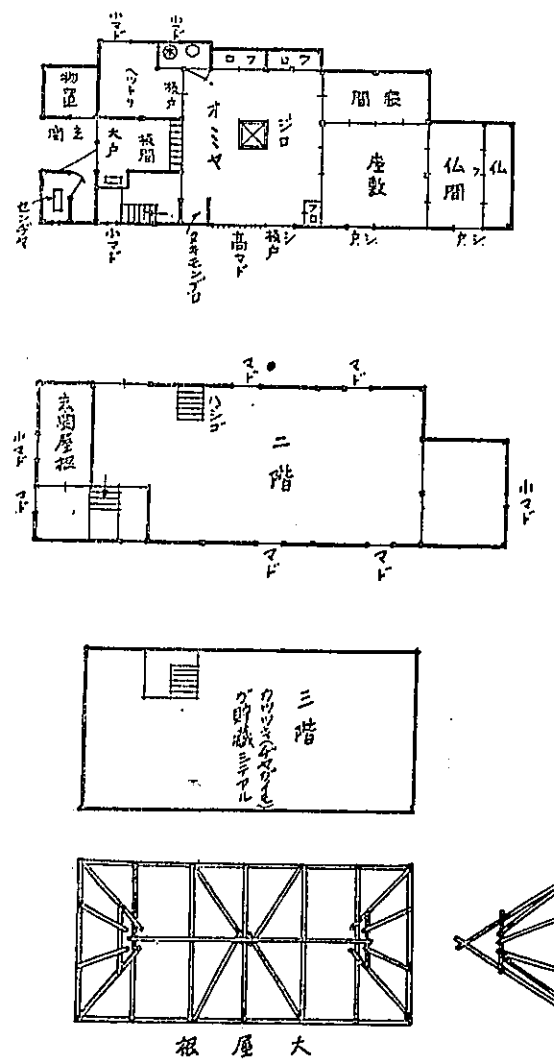
圖版説明

圖版第一、第二及第三 石川縣能美郡白峯村織田治兵衛氏の家であるが、此の村は加賀白山の麓の手取川の上流、牛首川の川筋に沿ふ山中の通稱牛首と云ふ部落で、極めて特異なる外観と構造とを呈してゐる。

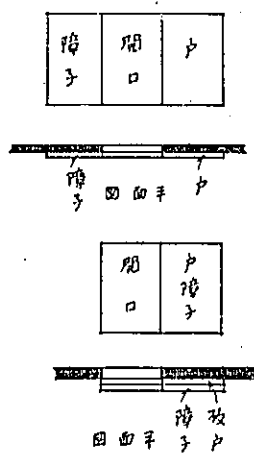
此の家は圖版第一に見える如く二階建てで屋根裏を三階に利用してゐる。一階は左の平面圖の如く、妻の方の入口の左右に便所と物置があり、大戸から内に入ると正面にオミヤと云ふ広い室があり、その奥に座敷と寢間が取つてある。座敷の奥の佛間は、十數年前増築したものである。オミヤは家の中心をなす広い居室であつて、ここにジロ(地爐)が切つてあり、横にフロがある。フロは戸棚のことで、この地方では凡て物を入れる場所をフロと云つてゐる。この間取は縣下の概観で説明した

第一圖及び第四圖の間取と同じ原型で、オミヤと云ふ名稱は、神社の御宮とその發音が一致してゐるが、語源の關係は不明である。

此の附近ではオミヤの事を又他の地方と同じく、オイエと云つてゐる者もある。この室にはジロの上にヒヤマと云ふ火の棚が造つてある。或る

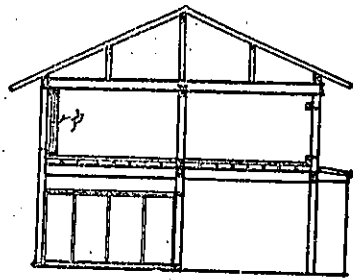


家では火棚は設けず、地爐の上部の部分の天井に簀を張つて、火氣が二階に上る様にしたものであるが、是もヒヤマと云ふ。此の地方ではネドコをラウダイとも云ひ、此處は家の主人の寢間で、上に低い中二階を造り物を上げて置くものが多い。そして押入は一般の家には無く、衣類等は柱等に掛け、蒲團の類は床の上に疊んで置く。この地方一般に佛壇は必ず下屋に取つて、大屋根の内には置かぬと云ふ事である。是は二階で佛壇の上を歩くのは勿體ないといふ信仰からである。然し平家の家でも必ず佛壇は下屋に造る習慣がある。壁の構造は小舞竹、徑二寸長さ二間位のものを用ひ、外部を大壁にして土藏造りの如く全部赤土で塗り、僅に採光窓を開けてある。窓の開口には密枠が嵌めてあり、その内部には上圖に示す如く障子と戸が建つ様になつてゐて、外観は一見南歐あたりの農家を見る様な感じがある。二階は普通に屋根と云ひ總て養蠶に使用する。三階は物置や農産物の貯藏に用ひる。



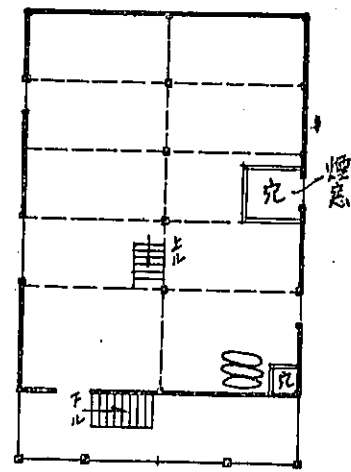
圖版第二の下圖は二階の内部で、上圖は三階の屋根裏を表はしたもので、草葺屋根の小屋組は前頁の断面圖に示す様に、中央の部分は六本の合掌がピラミット型に組んであつて、其の上に棟木が渡してある。棟の端には煙出しの穴があいて居る。

圖版第三はオミヤの内部を示すもので、正面の左の戸はテウダの入口で、右の帯戸は座敷の仕切になつて居る。座敷と寢間との間には中戸が建つて居る。左側の戸棚は上下共にフロになつて居る。此の様な特異な構造外観の家がこの地方に發達した一つの原因は、飛驒、白川及庄川沿岸の部落と同じく大家族制度と、其他同地方と同じ様な社會制度に原因して居るものと思はれる。そして此の地方の地理的關係から、この様な特殊な形態が發達したものだと思はれる。

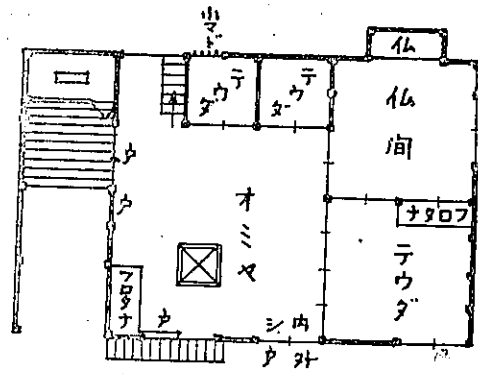


(圖 A)

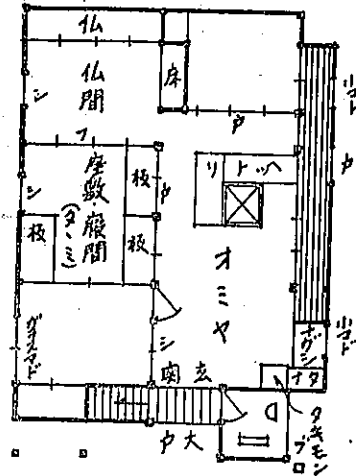
圖版第四 同村織田茂三郎氏の家で、二階建板葺屋根の、間取(A圖)は稍や變化して家の中央で仕切り、その片方にオミヤの広い室を取り、他方に寢間、佛間、座敷等が取つてある。此の様な間取は稍や變化した形であつて、前圖版の間取の方が原始的な形式を傳へて居るものと思はれる。そしてこの家と前の家との間取の中間にあるB圖の形式のものとを比較して見ると是等の變化の有様が明らかである。この家の構造も前の家と同じく大壁造りであるが、屋根は板葺で、その構造も稍や異



(B圖)



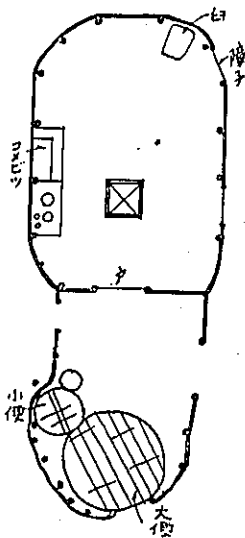
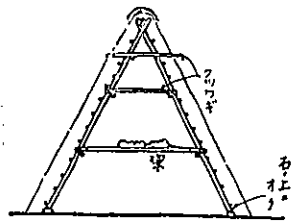
て居る。屋根の板葺は、ヘギタと云ふ栗木羽を用ひてゐる。ヘギタは長さ一尺八寸乃至二尺位、巾五寸乃至八寸位、厚さ七分の割板で、釘を用ひず石で押えるのが普通である。保存の爲め年に一度位裏返しをするが、是をクレカヘシと云ふ。棟には棟ゴロを置いて押えてある。妻の破風板の上には兩板を重ねて置く。圖版の上圖はその外観で、手前の葺下し屋根は入口の玄關と梯子の部分である。下圖はオミヤの流しの隅を示したもので、薪を置く場所をタ、キ、モン、ゾと云つて居る。



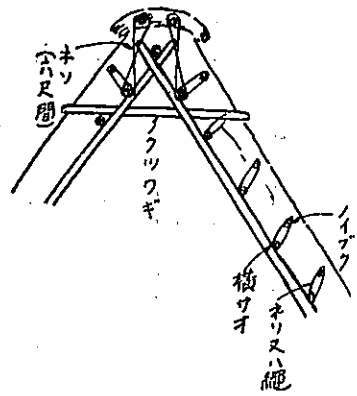
圖版第五

白峰村の山中には、根葺と稱する合掌造が、谷間の開墾地に建つて居るのが見られる。圖版第五は其の一例であるが、平面圖に示す様に其の間

取は一室の土間になつてゐて、土の上に粗糠を敷き更に藁を上に敷いたものである。其の中央にジロがあり、奥に夜具、臼等が置いてあり、手前の方には米櫃、鍋等の炊事道具が置いてある。此の家の間取は矩形の隅角が丸くなつて全體として階圓形に近い形をしてゐる。此の周圍



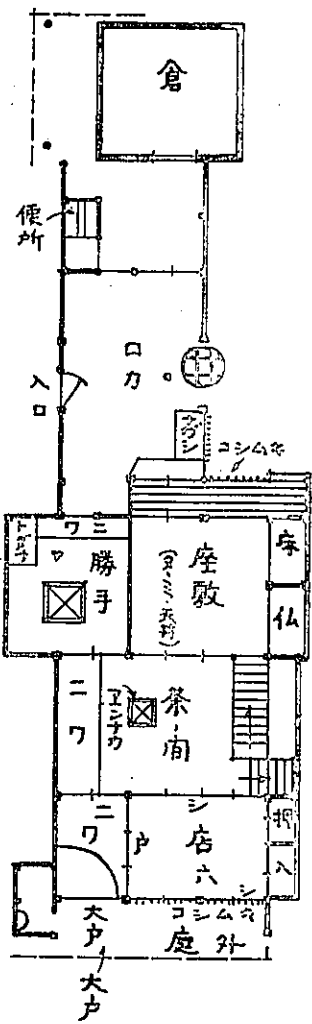
からサスが持ちかけられて棟木を支へてゐる。従つて屋根の兩端は圓錐形に近い格好をし、前面には煙出しの穴が開いてゐる。屋根はサスに梁を渡し、上部の圖の如くクツツギが渡してある。サスの上に横竿を渡し茅で葺き、ハイブクで押へてネン、又は繩でしばり着けてある。此の建物の入口は其の棟の一端の煙出しの下にあるが、其の前には小さな



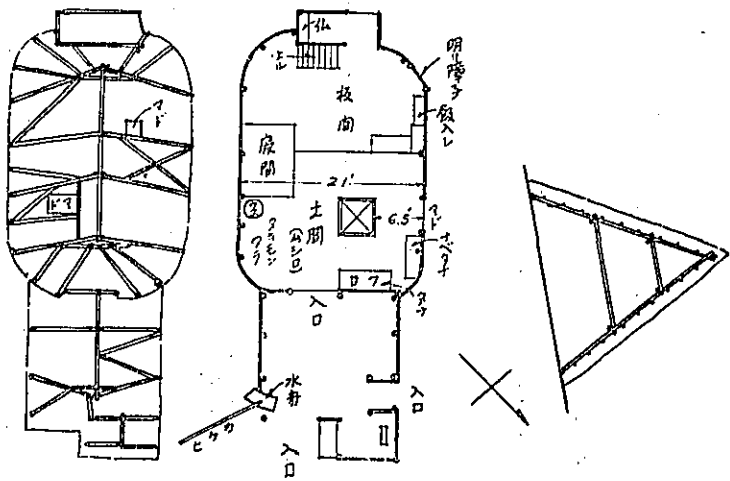
さしかけ屋根が掛つてゐる。其の一隅に非常に大きな便所の溜を設け、上に歩み板が渡してある。小屋の構造は極めて原始的で、恐らく古代の原始的住家の面影を傳へてゐるものではないかと思はれる。よく例證せられる飛騨の白川の合掌造りには後にも説明する様に、是に較べると稍や特殊な發達をした形式を傳へてゐるものであらうと思ふ。又構造的に見て、屋根を支へる爲に合掌を圓錐形に組合せる事は、最も原始的な形と見るべきであらう。此の様な原始家屋から、加賀、越前附近の縦屋造りが發達したものと

同じく下圖に示す中山岩三郎氏の家も同じ間取構造及外観を持った根葺の家であるが、この家は土間の奥に轉ばし根太の板間を設けてネドコに用ふ。圖面の寢間と書いてある處は仕切の着いた室では無く、低い高さ二尺位の箱のやうな圍ひのネドコになつて、其處に赤ン坊が寢てゐるが恐らく老人夫婦と、若夫婦の寢間は別れてゐるのではないかと思ふ。是れは稍や間取の變化の有様を示すものであるが、其他は前例と同じである。

圖版第六 鳳至郡穴水町の町端れにある農家室谷豊太郎氏の家であるが、この家は町家の形をもつた農家で、前に店の間があり、其の奥に茶間、座敷、勝手が縦に配列されてゐる。そして屋根裏は二階になつてゐるが、屋根は正面に破風を取り、其の前の店の部分は杉皮葺の二階造りである。店の前面には木ムシコと云ふ格子戸が建ち其の外に店の庇が突



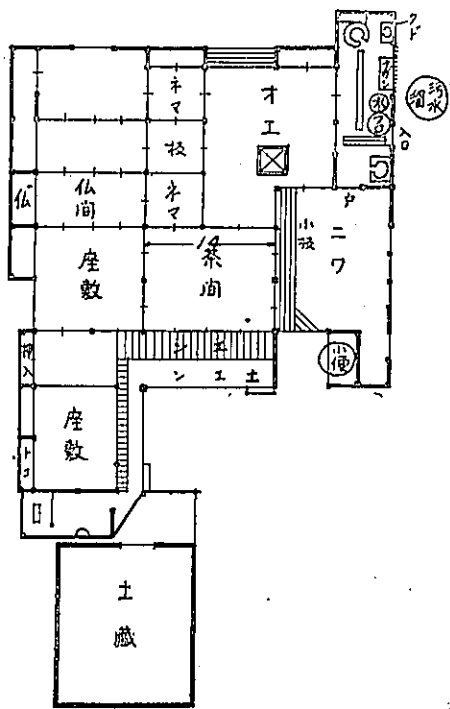
き出てゐるが、この部分を外庭又は玄關と云つてゐる。圖の如く室の左側には庭を設け、奥の勝手に通じてゐる。家の裏には廊下がつて裏の土蔵に上屋が連絡してゐる。この様な間取及構造は町家の



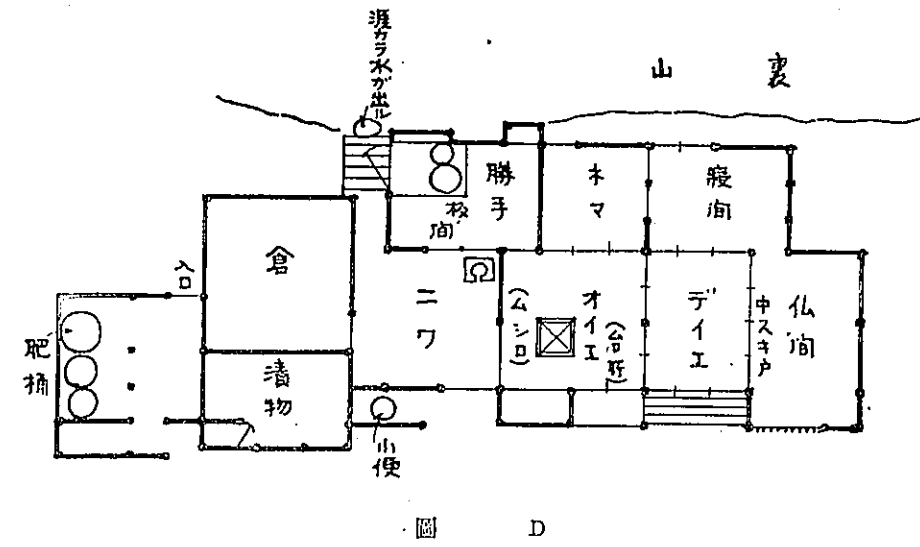
宅地割から自然に町家造りとして出来上つたもので、普通の農家とは異つてゐるものである。従つて縦入の間取りではあるが、町家造りとして發達したものと見るべきであらう。この様な例は次の富山縣の圖版にも見られるが、又其他の地方の實例に付いて見ても、何れも街村に發達したもので、町家の地割と離して考へる事の出来なものである。

圖版第七、第八 圖版第七上圖は穴水町宇鶴島、清水勝太郎氏の納屋であるが、この地方では縣下の概観で述べた様に母屋の下手に大きな厩と仕事場を兼ねた、母屋よりも大きい位の納屋が建て、あるものが多い。是はその一例で構造、外觀共にこの地方の代表的なものと見られる。棟に突き刺してある棒はコウガイ竹と云ひ、是に繩をかけて棟の造りを締めてある。C圖は其の母屋の間取であるが、この附近ではオエの間が裏の方に付いて、勝手用の用を兼ねてゐる。是は縣下の概観の第二圖及第三圖の中間の形式を現はしてゐる様に思はれる。

同下圖は同町山本余太郎氏の家の外観で、其の間取(一〇頁のD圖)は概観第二圖の整理廣間型と同じ形式のもので、佛間は後に増築したものである。屋根はオイエの部分で茅葺になつて後の寢間及勝手部分は板葺きで葺き足した構造になつてゐる。この様な構造は富山縣にも多く見られるもので、同じ間取及構造の系統に屬するものである。圖版第八圖はオイエの内部でジロの上にはヒヤマがある。この地方ではこのヒヤマの事を、コガマと云ひ、ネガギと云ふ大きな鍵が掛けてある。寫眞の正面の



富山縣



板壁の向ふは庭になっており、右の中隙戸の向ふは寢間になつてゐる。

